源氏＜寮＞物語　～蛍の章

兎浪みなと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
源氏＜寮＞物語　～蛍の章

【Ｎコード】
Ｎ７６０５Ｏ

【作者名】
兎浪みなと

【あらすじ】
なぜか変人ばかりが集う男女混合学生寮『源氏寮』。
屋上で花火大会のまっさいちゅう、寮生の一人が幽霊を目撃！
童顔の男ユーレイは「兵部蛍（ひょうぶほたる）」と名乗り、「桂を助けてほしい」と訴えるけれど…。
プロローグはシリアスちっくですが、基本コメディー意識の青春グラフィティ。

プロローグ――1年前

いつの間にか、川辺に来ていた。
昼間は憩いの空間であるその場所も、午後十時を回った今の時間帯は、人気もまばらでひっそりしていた。
繁華街に隣接する対岸沿いには、飲食店のいくつもの堤燈がほんわかと明かりを灯していたが、川のこちらと向こうでは、まるで別世界の情景を見ているような隔たりを感じる。
こちら側の土手の、数十メートル間隔に並ぶ外灯の中間地点ともなると、息を呑むほど暗い闇がひそんでいた。

「着いて来ないでったら」

仏頂面で足早に前を進む少女は、兵部蛍（ひょうぶほたる）にとって、今夜が初対面。
会ったばかりの青年にいきなり付きまとわれたら、誰だって不気味だろうし、もっともな言い分だったが……

「そういうわけにはいかない」

蛍は、威圧的にならないように気を遣いながら、きっぱりと宣言した。

「こんな時間に、女の子を一人で放り出すなんてできない。
しかも、後をついてくる男がいるのに、よりによってこんな人気のない河原なんかにくるような、明らかに夜遊び慣れしてない、世間知らずのお嬢様なら、なおさらだ」

少女が、くせのないまっすぐの長い髪を揺らし、こちらを振り返った。

ちょうど外灯の真下だったので、青白い光に照らされて、その姿がくっきり浮かび上がる。
きっと吊り上げた瞳は傷ついた色を映していたが、まっすぐな光があった。
一見、育ちのよさそうな優等生風の中学生、という印象だ。

「返すから。１０５円。これでいいでしょ」

１０５円……少女がコンビニで、無断で消しゴムを失敬したところ…平たく言えば万引きしていた現場を偶然目撃してしまい、気づいて色を変えた店員に、蛍が代わって支払った代金だった。
なぜ蛍がそんなことをしたかといえば、少女を目にした瞬間からなんとなく気になって様子を伺っていて（思い返せば、少女のかすかな挙動不審を、無意識に疑っていたのだろう）、実際犯行を目の当たりにしながら、現実にはぽかんと固まってしまい、未然に防ぐことの出来なかった自分に、罪悪感を感じたからだ。
店を出て逃げるでもなくすたすたと歩いていく少女に、呼びかけても諭しても無反応で、でも、そのまま放置する気にもなれず、ここまでついてきたのであった。
小銭を握って右拳を突き出す少女に、蛍は首を振って辞退の意を示した。

「だから、そういう問題じゃないんだ。
俺は、なんで君があんなことしたのか、事情を知りたいし、できれば相談に乗れたらと思うけど……いきなり会ったばかりの相手にそんな話せない、ってのもわかる。
だから、とりあえず、家に帰るって約束してほしい。
このまま俺が送ってもいいけど、家を知られたくないって警戒するなら、タクシー呼ぶから。
こんな夜中に、一人でうろついちゃ駄目だよ」

「……変な人」

ぽつりと、少女が言った。

「お節介」

「……わりと言われる」

「自分は？　高校生なら、何時までうろうろしてもいいの？」

「俺は、こう見えても大学生」

少女は切れ長の瞳を大きく見張って、それから、ぷっと吹き出した。

「うそ。ありえない。すごい童顔。

同級かとも思ったけど、年上ぶるから、高校生って言ったのに」

「童顔はよく言われる……けど、中学生はあんまりだ。傷ついた。謝れ」

がくり、と蛍が大げさに首を垂れると、少女はますます笑った。

緊張に強張っていた空気が緩むと、どこにでもいる無邪気な女子生徒に見えた。

「……帰りたくないんだもん」

さっきまでのピリピリした雰囲気はなくなり、笑いも収まると、今度はそこに、頼りなげな表情が現れた。

呟いて、土手の芝の上にぺたりと腰を下ろす。

そのまま、ずっと、星を見ていた。

蛍も、一定の間隔をあけて、立ったまま、少女に並ぶ形で一緒に空を見上げた。

京都も、都会の割にはよく星が見える。

土地の景観を大切にして、高層ビルが少ないせいであろうか。
星星の中でもこの時期一等目に付く、南の空に赤く輝く星は、さそり座のアンタレス。
真上に夏の大三角形、ベガ、デネブ、アルタイル。
そして、幻想的な天の川。
そういえば、明日は七夕だ……。

「星、好きなのか？」

蛍の問いに、少女は小さく頷いた。

「目で見える、一番遠いところにあるものだから。
なのに……ううん、だから、かな、あんなにキラキラして。
……どんな時でも……見えない時はあっても、いつも変わらず空にはあって、キレイなまま。
好きだよ」

それから一時間以上、何も話さず、二人して夜空を見上げていた。
何も言わない方が、少女の抱くなんらかの悲しみに寄り添える気がして、蛍は、ただ黙って隣にいた。
やがて、少女が立ち上がった。

「帰る。ちゃんと、タクシー使うから」

すっかり落ち着いた、さっぱりした顔と声だった。

「そっか。あ、ちょっと待って」

メモ帳にさっと走り書きしたのは、蛍の名前と連絡先。

「気が向いたら、電話でも、メールでも」
「……ナンパ？」
「中学生になんて興味ねーって。
でも、なんなら、遊んでやる……変な意味じゃなくて。
自慢じゃないけど、俺、遊び上手だから。非行に走るより、楽しいぞ、きっと」

最初より随分くだけた口調になった蛍に、少女も、肩の力を抜いて、頷いた。

「今、何時？」
「えっと、零時十五分前。ほら、子どもは早く寝る」
「子ども扱いしないで！」
「そういうこと言うのが子ども」
「自分だってどう見ても子どものくせに……」

軽口を言う余裕さえ出てきた様子に、ほっと胸を撫で下ろす蛍。
一方少女は、間に合った、と一人ごちると、蛍に言った。

「あのさ、『誕生日おめでとう』て言って」
「……誕生日、おめでとう」
「ありがとう」

……ギリギリお祝いしてもらえてよかった、と微笑むと、少女は土手から道路まで上がる階段に足をかける。

「おやすみなさい」

すぐにタクシーは捕まって、少女は去っていった。
遠ざかるテールランプを見つめながら、年に一回の誕生日でさえ

……いや、もしかしたら誕生日だったから？　……一人で、闇の中を彷徨っていた少女の寂しさが、改めて蛍の胸に迫ってきた。
蛍はなんともやりきれない気持ちを振りきるように、小さな呻きを漏らしながら、何もないアスファルトの地面の上で、大きく足を蹴り上げた。

1．「彼氏が欲しい」

「彼氏が欲しい…」

式部学園源氏寮（しきぶがくえんげんじりょう）の食堂で、六条紗妃（ろくじょうさき）の口から漏れた一言に、周囲は完全に意表を突かれてぽかんとしていた。

１６歳、思春期真っ只中の少女としては至極一般的な願望であろうが、それを言った人物があまり「一般的」ではないと認識されていたからだろう。

六条紗妃。源氏寮桐（きり）２０１号室在住。

一点の濁りなく透き通った白磁のような肌に、長い睫に縁取られた聡明そうな瞳。

とおった鼻筋、木苺のような瑞々しい唇。

非の打ち所なく整った顔立ちは、ふわっと波うつ長い髪に包まれ、滲み出る気品はまさに生まれながらのお嬢様。

そんなわかりやすく「美少女」の紗妃であるが、性格は全然わかりやすくなかった。

そもそも語尾に「～ですわ」までつけるような（↑註、これは比喩ではない）札付きのお嬢様が、なぜこんな、床のタイルがところどころ剥がれ、天井にぶら下がる蛍光ランプも一部切れ掛かってチカチカしているような、うらぶれた寮食堂に当たり前のように馴染んでいるのかは、誰もが気になっているが誰も知らない大いなる謎の一つである。

以前、紗妃のルームメイトである雲居明雁（くもいあかり）がストレートに

「なんで貴女みたいなのがこんなボロい寮に住んでるわけ？」

と尋ねたらしいが、明雁曰く、紗妃はいくつも薔薇が咲き誇ったかのような鮮やかな笑顔で

「聞いたら不幸になりますわよ（はあと）」。

明雁は固まってしまい、それ以上追求不可能だったそうな。

秘密主義で、超然とした存在。

それが紗妃のイメージだったため、とても世間並みに恋愛に興味があるとは思えず、冒頭の台詞一つで、その場で夕餉（ゆうげ）をとっていた私、源未景（みなもみかげ）を含めた数名はあんぐりと口をあけ、言葉を失ったのであった。

「……作れば？」

明雁の返しには、やや呆れたような響きがあった。

その一言を皮切りに、

「六条さん！　自分でよければ！」

「立候補させてください！」

「全身全力で尽くします！」

と、近辺で食事をとっていた男たちの必死のアピールが始まり、にわかにかしましくなる。

その完璧な美貌から、数多の男どもの魂を奪い、食堂に足を踏み入れるやお取り巻きがわらわら寄ってくる紗妃である。

より取り見取りのはずだが……紗妃は、大騒ぎする一同を見回し、にっこりと美しく微笑んだ。

「すみません、言葉が足りませんでしたわ」

そして、もう一度、小さくため息をつきながら、よく通る声で、言った。

「『かっこいい』彼氏が欲しい……」

軽率な男子寮生どもを一斉に玉砕せしめる一言。

きついな、と戦慄すると同時に、天晴れ、とついつい感心もする私である。

「……で、なんでいきなり？」

すっかり静かになったテーブルで、明雁がフォークを振りながら真意を問うた。

「確か私たち、夕霧（ゆうぎり）たちから『七夕花火大会』の企画を聞いてたのよね？」

話題を振られて、明雁の彼氏、山里夕霧（梨１０４号室）と、敬愛する蕾（つぼみ）様……ご本名、藤野蕾（ふじのつぼみ）様（桐２０２号室）が、こくこくと頷かれた。

そう、夕食のさなか、源氏寮のイベントを司る「文化部」所属の二人が、七夕の夜に行われる寮内イベントについて話をされていたはずだ。

私と明雁と紗妃、そして紗妃の取り巻きの男子寮生数人は、それを聞いていたところだった。

「だって、七夕の夜に、花火でしょう？

せっかくのロマンチックなイベントですから、彼氏の一人や二人いても良いかしら、と思ったわけですわ」

いや、二人はまずいだろう。

「とはいえ、いい男は大概彼女持ちですしねえ…夕霧くん？」

紗妃から意味深に矛先を向けられた夕霧が、ゴホッとパスタを詰まらせ、明雁の鋭い声が飛ぶ。

「紗妃？」

「冗談ですわ。もちろん」

つくづく、いい性格をしている。

「ああ、でもそうだよね～。

今恋人いなくて寮で一番かっこいいのって、たぶん未景（みかげ）ちゃんだもん」

朗らかな蕾様の一言に、今度は私がゴホッと喉を詰まらせた。

「つ…蕾様？」

「あ、それいえてるー」

「確かに」

「最強かも」

「俺たちも『美陰（みかげ）の君』には敵わねーや」

盛り上がる周囲だが、私は目を白黒させるしかなかった。

一体どう反応しろと！？

源未景（みなもみかげ）。

１５歳。

式部学園１年５組出席番号３９番。

源氏寮では、光栄にもみん様と同じ、桐２０２号室。

寮内のあだ名は『美陰(みかげ)の君(きみ)』。
性別、女。
そう、女なのである。
もちろん、口下手の無愛想で（話し方からして堅苦しい自覚はある）根暗な自分が「可愛い」と表現されるわけはないことは重々承知の上だが、「かっこいい」？
１７５ある身長のせいだろうか…。

「かっこいい、ですか？私が？」
「うん！」

力強く満面の笑みで蕾様に肯定され、私は頬が紅潮するのを感じた。（といってもこの鉄面皮、周りからはほぼ気づかれない程度の赤みであった点は幸いである。）
蕾様は純粋で清らかなお心の持ち主である。
私たちがお互いにまだ七つという幼少の砌(みぎり)、蕾様に凶暴な野犬から救っていただいたあの運命の出会い以来、私は蕾様に心服し続け、絶対の信頼を預けていた。
蕾様は他意を持って嘘偽りを述べたりは決してなさらない。
蕾様がおっしゃるのだから、ここは素直に喜んでおこう……。

「ありがたきお言葉、いたみいります」

深々と頭を下げたら、蕾様も「いえいえ、どういたしまして」とまたにこにこと微笑まれた。
この世の濁りが全て浄化されるような、万物の生命の源たる太陽のような眩しい笑顔！
その笑顔を向けられた大いなる感動の中では、たとえ明雁の小さな「ま、ヘンタイだけどね」という呟きが耳にとまっても、別にどうでもいいことなのであった。

2．花火大会スタート

私立式部学園高等部付属学生寮、源氏寮は、高校ではおそらく非常に珍しい、男女混合の自治寮である。

建物は梅棟、梨棟、桐棟の三棟あり、梅と梨が男子寮、桐棟が女子寮となっている。

それぞれ2階建てで、二人部屋が全３０室。

他に各フロアに一箇所ずつ炊事場、トイレ。各棟に一部屋ずつ談話室。

玄関横に事務室。

全寮生の共用スペースとして、食堂、図書室、玄関横の応接間（別名〈平庵郷〉）、地下物置が存在する。

寮費は維持管理費、水高熱費込みで、月４０００円。

激安なだけに、とても年代物のオンボロ寮である。

外壁は、煤けた剥き出しの鉄筋コンクリート。

垢や埃にまみれ、曇った窓ガラスは、ところどころヒビが入り、割れっぱなしのところもある。

個室以外は土足オーケーのため、床も真っ黒で、内壁は過去の高校生達の悪ノリがそのまま残された落書きや、不規則に貼られた新旧の部活の新歓のビラで、雑多な印象この上ない。

不精な寮生が多いため、どこも汚かった。

ただ、食堂とトイレだけは、当番制で掃除しているため、一定のレベルを保てているのが救いであるが…女子寮であるはずの桐棟のトイレにも、なぜか男子用便器が並んでいた。（全棟男子寮であった時代の名残である。）

式部学園の校訓〈自主・自律・自由〉の三自の精神が反映された結果、寮生が寮に関する管理、維持を全て行うことになっている。

故に、管理人はおらず、入退寮者の選考や、主に受付を担当する事務室の係、朝夕の寮食の皿洗いなども当番制で、学生自身が行っていた。（ただ、寮食を調理してくれるおばさん、もとい「おねえさま」達はいる。）

ちなみに私は以前、

「いくらなんでも、窓ガラスくらいは補修してもいいのではないでしょうか」

と、寮長である仁王文哉（におうふみや）先輩に進言したことがあったが、仁王先輩曰く、

「あ～、じゃ、そのうち。けどこのままでも、廃墟みたいでおもろくね？」

恐ろしいことに、その時周囲にいた面々もなんとなく賛同する空気を醸（つぼみ）していたのである…。

蕾様まで

「ですね♪」

とご同意を示されたとあらば、もはや私はすごすごと引き下がるのみ。

寒さの極みに達する冬季までは割れっぱなしと見た。（この寮の住人達は基本、変人ばかりである。）

寮を運営するため、全寮生は〈炊事部〉〈庶務部〉〈厚生部〉〈文化部〉と、寮長や各棟長からなる〈執行部〉の五つのうちどれかに所属することになっていた。

蕾様は寮内イベントを企画・実行し、寮生同士の交流を図り、し

いては寮活動が円滑に行われることを目的とする〈文化部〉部員だ。
最近は、来る七月七日土曜夜に屋上で行われる「七夕花火大会」の準備に余念がなかった。

その日、夕食を終え、自室に戻られるや、蕾様は早速部屋の片隅に置かれていたミシンをひっぱりだし、コンセントをお繋ぎになられた。

「裁断は終了されたのですね」
「うん、やっと縫製作業に入れるよ」

蕾様は花火大会で織姫の格好をなさることに決まったそうで、毎日熱心にそのためのご衣裳の製作に当たられていた。

「大変ですね」
「ううん、趣味と実益を兼ねて、だし」

そういえば、蕾様はコスプレがお好きだと伺ったことがあった。
学校では手芸部に所属されていらっしゃるくらいだし、裁縫もお得意なのだろう。
しかし、運悪くその手芸部の出展とも重なったらしく、別の作品とも同時進行で、更に進学校である我が校から連日大量に出される課題をこなしながらの、睡眠時間を削ってのご作業はお労しい。
「私でお手伝いできることがあれば、なんなりとおっしゃってください」
申し出た心に嘘はなかったが、

「本当？」

と、こちらを振り返った蕾様の瞳が、あまりにキラキラ輝いていたので、正直びびった。

な、何事ですか？　蕾様！

「まもなく七時から花火大会が始まります。全寮生は梅棟、または梨棟屋上に集合してください。

繰り返します……」

寮内アナウンスに促されるように、バタバタと部屋の前を行き過ぎるいくつもの足音が聞こえる。

「急がなきゃね、あとはこの帯を巻いて……完成！」

ぐるりと回した紐を前で固結びした蕾様は、二、三歩下がって私の全身を眺めると、パッとお顔を明るくされた。

「すごい！最高だよ！未景ちゃん。和装の王子様みたい！」

「あ、ありがとうございます……」

七夕花火大会で、私はなぜか彦星の格好をすることになってしまっていた。

星の散りばめられたような緑の生地で作られた短い丈の着物（襟元と袖口は金で刺繍された別布に切り替えてある）に、紫の帯、こげ茶のだぼっとしたズボン…。

衣装は全て、蕾様のお手製であるが、シルエットといい縫製といい、素人仕事とは思えない出来である。

「色が白いから着物も似合うんだよね。みんな喜ぶよ～。
あ、あとはこの烏帽子みたいなの被ってね。
紐を首の下で結んで……完璧！」

蕾様はご機嫌でうんうんと頷き、ご自分の作品の完成度に感動していらしたが、壁にかかっているキャラクター時計が示す時刻を見るや、いけない、とお顔を引き締められた。

「もう始まっちゃってる。私も着替えてすぐ行くから、未景ちゃん、先に行ってて！」
「かしこまりました」

普段あまり上ることのない、梨棟の階段を上りながら、体がじんわりと汗ばんでくるのを感じる。
鉄筋コンクリート製の源氏寮は、周囲を密林のような雑木林にみっちりと覆われたせいもあり、湿気が多く、先月から蒸し暑い日が続いていた。
薄手の生地とはいえ、下にTシャツも着ての長袖は暑い。
それにしても七月初旬からすでにこの体感温度…本格的な夏の到来が恐ろしい今日この頃である。

屋上に近づくにつれ、賑やかになってきた。
寮生達が叫んでいる。

「きたああ」
「ぎゃああ」
「あっぶね！！」

……花火大会、だよな？
屋上の扉を開ける。

暗闇の中、ひゅーーん、という音と共にいきなり足元に光の矢が降ってきて、心臓が止まりそうになった。
な、なんだ！？
「こっちも負けるな！第二段用意！」
仁王先輩が号令をかけ、梅棟に面した屋上の端に並ぶ男子寮生たちが、意気揚々と手元の花火に点火する。
しゅるるるる…
「発射あ！」
導火線が全て消える頃合を見計らって仁王先輩が叫ぶと、いくつものロケット花火が宙を舞い、梅棟目掛けて突っ込んでいった。
「うわあああ」
「やべえって」
と、今度は梅棟側で大騒ぎしている声が聞こえる。
棟の両端からロケット花火の打ち合いをやっているらしい。
そうだよな……
ここの住人どもがしっとり花火に興じるなんて、風流なことだけで満足するはずがない。
時間的には夜の帳が覆い始めていたが、角に設置された大きなスポットライトが、屋上一帯で和気藹々と過ごす寮生たちの姿を温かな光で浮かび上がらせていた。
「ねえ、そんなとこいたら危ないって！」
後ろから近寄ってきた明雁（あかり）は、振り返った私の姿を見た途端目を

見張り、にや～っと頬を緩めると、大声で周囲に呼びかけた。

「彦星様、ご到着～～」

一斉に集まっていた寮生の視線が集中し、屋上のざわめきが一瞬途切れる。

かと思えば大きな歓声が沸き上がり、思いっきりビクウッとしてしまった。

「すげーー」
「完成度高っ」
「王子様だ～」
「カッコいい～～」

ここの寮生達のノリのよさは承知の上だが、ここまで盛り上がられるとなんとも面映い。

まあ、蕾様がおっしゃっておられたとおり、皆に喜んでもらえてよかった、と一安心である。

「未景ちゃん、写真撮らせて！」

桐２０５号室在住にして式部学園新聞部のエース、若本紫先輩が、一眼レフを片手に接近してきた。

紫先輩は、れっきとした高校二年生にもかかわらず、驚異的な童顔に身長１４０センチ強という華奢な体躯も相まって、一見小学生のようなあどけないルックスをしておられる。

とはいえ、内面はしっかり者の世話好きで、桐棟の棟長まで務めてらっしゃる、明るく頼れる先輩だった。

……多少強引なところはあるが。

「学園のアイドルが彦星に！　こりゃ発行部数二割増しだよ♪
あ、こっちの笹の下がいいな」

学園の……って誰が？
と、問う余裕も与えられず、あれよあれよと引っ張られていった先は、梨棟屋上でも桐棟側の、ロケット花火が届かない安全スペースだった。
女子寮生が多く溜まって、こちらでは平和に手持ちで花火をやっている。
すれ違いざま、また、先輩達から

「超似合うよ」
「素敵！」

などとお褒めの言葉（？）をいただき、恥ずかしい。
フェンスに、寮生たちが飾り立てた大きな笹が立てかけられていた。
短冊を読んでみる。

『成積をあげたい。』

まず漢字を重点的にやるべきかと。

『一夫多妻制』

アラブに籍を移せ。

『六条さん付き合ってください。』

本人に言えと。

「……まともな願いが一つもないような」
ぼそりと呟いた所、近くにいた紗妃(さき)が
「真面目に書いても仕方ない気もしますけどね」
と、冷静なコメントをくれた。
「年に一回しか会えない二人ですもの。
逢瀬に夢中で、他人の願いなんてきいている暇があるとは思えませんわ」

言われてみれば、至極もっともである。
いつの間にやら紫先輩は、シャッターをカシャカシャきりまくっている。

「いいね～美少年だよ～。美しい～。ね、未景ちゃん」
「なんでしょうか」
「『お兄様』って呼んでいい？」
「嫌です」
「即答～？」

ヨヨヨヨヨ……と傷ついたように泣きまねをする紫先輩。
動作の大きい人である。

「続きまして、織姫様、ご到着～～」

明雁の弾んだ声が響き、一同は再び入り口に視線を集めた。
またもや、歓声とため息が上がる。

誰かがピューッと指笛を鳴らした。
たった今、屋上に登場された蕾様は、腰を覆うほどの長さの白いお着物の上から、更に短い丈の小花柄の薄紫の被布を掛けられ、アクセントに虹色の細帯を巻かれていた。
袴（スカート？）はシフォンのようにふんわりしたピンク。
頭頂で複雑に結われ、半分下ろされている長い黒髪は鬘だろう、そこに袴と同色のピンクの薄絹をショールのように羽織られたお姿は……文句の付け所のないお衣装に引き立てられ、その愛らしさ、可憐さに置いても、紛れもなく織姫であった。

「蕾様……なんと、なんとお麗しい……」

これ以上に織姫の似合うお方もおられまい……！
感動にうるうるしていたら、きょろきょろと辺りを見回されていた蕾様と目が合った。

と、蕾様は「彦星様！」とお叫びになるや、すごい勢いで私に抱きついてこられるではないか！
つつつつつ蕾様！？

「どれだけこの日を待ちわびたことか……お会いしとうございました」

ぽろぽろと両の双眸から大粒の涙を零される蕾様。
演出……にしてもあまりに迫真で、たじろいだ。

「彦星様、お慕いしております……」
「ちょ、蕾様、どうなさったのですか！？」

あろうことか蕾様、熱い眼差しのまま、私に唇を寄せていらっし

ゃるではないか！
私もお慕い申し上げてはいるが、こういう関係を望んでいるわけでは全くない。
周囲は虚を突かれつつも、赤裸々なラブシーンに
「おお～」
と、吐息を漏らしている。
こら、誰でもいいから蕾様をお止めしろ～～！
救世主は、明雁だった。
がしっと蕾様を羽交い絞めにする。
「さすがに隣の部屋の二人がカップルってのはねえ……ここ、壁も薄いし」
「離して！　邪魔しないで！」
真っ赤になってもがく蕾様。
明雁はそのすらりと伸びた肢体からは想像もつかない、フライパンも軽く曲げる程の怪力の持ち主である。
そんな明雁でも、足を蹴り上げ、絡む腕に噛み付こうとまでなさる蕾様の暴れぶりには手を焼くようで、顔をしかめつつ、私に、
「その服、ちょっと脱げない？」
と、言ってきた。
「は？」
「いいから！あとその帽子も取る！」

よくわからなかったが、羽織っていた着物を脱ぎ、上半身Tシャツ姿になった。
帽子もはずすと、突如として、蕾様の暴走は収まった。
「あ、未景ちゃんだったんだ。でもそれじゃあ彦星様は何処に？」
訳がわからずぽかんとする一同に、説明したのは紗妃だった。
「蕾さんは、コスプレすると、そのキャラの能力や人格をほぼコピーしてしまうという性質がありますでしょう？」
……そうだった。
滅多にお目にかかる機会がないので忘れていたが、そういえば春に行われたクラス対抗球技大会の時も、バレーアニメのキャラクターになりきって超人的なサーブやレシーブを連発しておられた記憶がある。
今の蕾様は「織姫」であり、彦星に扮装した私は、ずっと恋焦がれてきた愛しい男そのものであったというわけか。
事態が落ち着いた頃合を見計らって、寮長の仁王先輩が
「え～っと」
と、声を張り上げた。
「ハプニングで彦星はいなくなっちまったけど、こうして織姫も来てくれたわけだし……
花火大会、楽しんでいこうぜー」
「おお～」

3．ユーレイ遭遇（前書き）

3．ユーレイ遭遇

棟対抗のロケットの打ち合いは一段落ついたらしく、梅棟のいた寮生たちもこちらに移動してきて、今度は噴出花火……地面に置いた筒から火花が噴水のように吹き上がるものに興じていた。
時折、ネズミ花火やＵＦＯ花火を投げつけあっては、ぎゃーぎゃーはしゃいでいる。
相変わらず、賑やかこの上ない。

「彦星」がいなくなってからの蕾（つぼみ）様は、至って普通のご様子であられた。
明雁（あかり）や紗妃（さき）と他愛もないおしゃべりを交わされながら、弾け飛ぶ色とりどりの光を鑑賞されたり、手持ち花火を振って、その残像で名前や☆の絵を描かれたり……
存分に楽しんでいらっしゃった。
ただ、時折きょろきょろと心許なげに、夜空を見上げられる。

「いかがなさったのですか？」
「えと、彦星様、遅いなあって思って」

……この格好をしておられる限り、普通に見えても普通ではありえないらしい。
おいたわしや……。

普通でないといえば、なんとなく、３年の先輩達の様子が、昨日一昨日あたりからおかしかった。
３年生は忙しいので、こういうイベントでもなければ、あとは朝夕の寮食堂での食事の時間を除くとあまり顔を合わすこともないのだが。

食堂でもなんとなく静かで、おしゃべりが盛り上がっても、少しするとまた沈黙が訪れている……ように見えた。
今日の花火でも、なぜか3年生の弾け方だけは、どこか、少し、不自然に感じられた。

特に、仁王（におう）先輩だ。
お祭り騒ぎが大好きで、実際さっきまで、騒ぎの中心で大はしゃぎしていた仁王先輩。
それなのに、いつのまにか、すぐそこで物憂げに欄干にもたれていた。
入寮して、知り合って3ヶ月ほどの私が仁王先輩の何を知るわけでもないのだが、普段の先輩からすれば、あまりにらしくない……

と、ぼんやり懸念していたら、突然。

「彦星様！」

蕾様がパッとお顔を輝かせ、虚空に向かって両手を差し伸べられたのである。
あわわわわ。
蕾様、しっかりなさって下さい！
誰か、これへ！姫、ご乱心〜！
……内心では大騒ぎしつつも、とにかく反応速度の鈍い私は咄嗟に行動に移せない。
外見ぬぼーっとただ突っ立つのみである。
一方蕾様は、天の川に向かってうっとりと

「彦星様……」

と、呟いてらっしゃったが、やがて、

「……違う」

と怪訝なご様子で眉を顰められた。

同時に、紗妃(さき)が、険しい表情で、

「蕾さん、反応してはいけません！」

と、蕾様に囁く。

な、なんだあ？

「でも紗妃ちゃん、あの人、彦星様じゃないけど、なんか一生懸命しゃべってる……」

「関わっては駄目です！目を合わせない！」

事情が飲み込めず、周囲に目を走らせると、明雁(あかり)も、異変に気づいた他数人の寮生たちも、ぽかんと事の成り行きを見守っていた。

どうも、蕾様と紗妃だけが、特別な「なにか」が見えてるらしい……。

「蕾さん、『彼』は現の人間ではありません。

他人が認識することで、ますます未練のカタチが輪郭をもち……」

「……ひょうぶ、ほたる。それがあなたの名前？」

蕾様が、中空を見つめつつ呟くと、紗妃は深く嘆息し、首を垂れた。

もう、取り返しがつかない、と言うように。

「兵部蛍(ひょうぶほたる)？」

食いついてきたのは、仁王先輩だった。
「蛍先輩が、まさか、そこにいるのか？」
「仁王先輩、ご存知なんですか？」
「藤野（とうの）、その人どんな外見？何言ってる？」
「小柄で童顔で、なんか可愛い感じの中高生くらいの男の人です。切羽詰った表情で、『助けてほしい』って……」

仁王先輩は
「蛍先輩だ……」
と、呟くと、一瞬呆然としていたけど、すぐに真剣な口調で話し始めた。
「藤野、蛍先輩は俺の二個上で、ここの寮長をやってた人だ。俺だけじゃなく、同期は皆いっぱい面倒見てもらって、すごく良くしてもらった。
その先輩の頼みだ、どんなことにしろ力を貸したい。詳しく話を聞いてくれ」

紗妃も、もう諦めたようでとめようとはしなかった。
蕾様は宙を見上げて耳を済ませていたが、困ったように、眉を寄せた。
「……すみません、なんか今ひとつよく聞き取れなくて。うつろなまま、ただ、助けて、ついてきてくれと繰り返してます。あと、何かもう一つ……『かつら』？　イントネーションからして名前みたいですね。
『かつら』を助けてほしい？」

「強い思いが残り、成仏し損なっていますが、意識があやふやなのです。霊は、不安定な状態なので」

きっぱりと断定する紗妃。

なにやら詳しそうなのはいったい……。

霊、と仁王先輩が呟いた。

「確かに、蛍先輩は一昨日、亡くなったんだ。交通事故で。3年はほとんど全員、昨日、葬式に行ってきた」

……3年生たちの妙な雰囲気は、そのせいだったというわけか。

お世話になった先輩に訪れた、突然の死。

まさか、その先輩が幽霊になって寮に現れるとは、いつも悠々としている仁王先輩でも、さすがにショックを隠しきれないようだった。

しかし仁王先輩、危急の事態だと承知したらしく、ぱん、と自分の両頬を叩いて喝を入れ、

「わかった、俺が……」

と、言いかけたとき、新たに別の3年の先輩が緊迫した表情で駆けて来た。

「文哉、梅棟の1年が倒れた。かなり酒を飲んでたらしい。救急車呼ぶか？」

仁王先輩は顔をしかめ、すみません、と「蛍先輩」のいるらしき空間に頭を下げてから、蕾様と紗妃に向きあった。

「おまえら、先輩の力になってくれ。頼む。俺も、行けそうならあ

とで行くから」

言うや否や、病人の方へ走っていく。

頼まれなくても、蕾様はそうされただろう。

困った人を見ると、どんな相手であろうと、手を差し伸べずにはいられないお方だ。

「行きましょう！」

『蛍先輩』に頷くと、だっと裾を翻された。

小さく吐息を漏らしながら紗妃が、そして明雁があとに続く。

私ももちろん、ご一緒いたします！

梨棟階段を下りたところで、蕾様が、

「あ、ちょっとごめん」

と、急ブレーキをかけた。

「このままじゃ自転車乗れないや。一分で着替えてくるから、ちょっとだけ待ってて！」

とおっしゃって、脱兎のごとく自室に戻られる。

確かに、織姫の衣装のたっぷりしたロングスカートは、車輪に絡まりそうである。

そうか、どれだけ遠いかわからないから、とりあえず自転車に乗るというのは正解だろう……私はダボダボだがズボンだから大丈夫かな。

……などと考えていたら、もう帰ってこられた。

本当に一分も経っていない。
部屋への往復を考えると、奇跡のような早着替えである……が、驚きどころはそこだけではなかった。

「蕾、何、その服」

廊下の向こうから駆けてくる蕾様に、明雁がツッコんだ。
蕾様はなぜか、紺のブレザーに膝丈スカートの上下という、婦警の制服を身に纏ってらっしゃったのだ。

「事件の香りがするから、ＴＰＯに合わせて、ね。ちょうど、手芸部の展示用に作ってたのが、完成したとこだったし」

うちの学校の手芸部って……。
唖然とする一同にお構いなく、蕾様は

「さ、行こう！」

と、促したものの、不思議な顔できょろきょろと目線を泳がされる。

「あれ、蛍先輩は？」

……はい？

「私の隣にいるじゃありませんの。……もしかして、蕾さん、見えなくなったのですか？」
「……そうみたい」

目をパチパチされる蕾様に、紗妃ははあ～っと脱力してから、

「まあ、いいですわ」

と、首を振った。

「蛍先輩も急いで欲しいそうなので、すぐ現場に向かいましょう。私は自転車乗れないので、明雁さん、後ろに乗せてくださいな」

4．『かつら』救出

紗妃（さき）を介しつつ、蛍先輩の案内で連れて行かれたのは、自転車で十分ほどの、繁華街からは少し離れた所にある、普通の喫茶店だった。

「『こだまかつら』という名を繰り返してます。……あ、あの髪の長い子の名前みたいですね。あの子を助けろとおっしゃってるようです」

紗妃の説明を受けて、ガラス越しに中を見ると、奥の席に、艶やかな黒髪の少女の横顔が見えた。

中学生くらいだろうか。

切れ長の大きな瞳はずっと下を向き、目の上でぱつんと切りそろえられた前髪といい、滑らかな頬も小造りの鼻も赤い唇も、まるで日本人形のように端正だったが……まるで人形のように、無表情だった。

向き合って、一人の中年の男性が座っていた。

一見、写真家かジャーナリストかフリーターか……とりあえず企業勤めの雰囲気ではない砕けた格好。

黒い髪に覆われた顔は、少女とは対照的に大きく相好を崩し、不躾な視線で『かつら』を鑑定しているように思われた。

「これは犯罪のニオイがするね」

眉間に皺を刻み、蕾（つぼみ）様が呟かれた。

「出会い系……という単語が、蛍先輩から聞き取れました」

淡々と、紗妃が説明する。

「やることはわかったわ。中入る？」

手をポキポキ鳴らしながら、明雁。

「いや、ちょうど出てくる」

髭黒（ひげくろ）（勝手に命名）は勘定を済ますと、馴れ馴れしく桂の肩を抱き、店から出て駅の方に向かおうとする。

その背中に、蕾様が一喝した。

「ちょっと待ちなさい！」

振り返った髭黒は、蕾様の女性警察官のお姿を見るや、明らかに一瞬、まずい、とでもいうように焦りの表情を浮かべる。

しかし、他の面子と、蕾様が本職の警官にしてはお若すぎるのをみてとるや、今度はにやにやと媚びるような笑顔を向けてきた。

「何かな、お嬢ちゃんたち？カツラちゃんのお友達かい？」

蕾様はそれには答えず、つかつかと髭黒に接近する。

「児童買春未遂容疑及び青少年保護育成条例違反の現行犯で逮捕します！」

凛然と宣告すると、鮮やかな手つきで髭黒の両手に手錠（玩具だろうが）をかけた。

一瞬の早業。

髭黒が、えっと戸惑う隙に、今度は明雁（あかり）が飛び出した。

「こ〜の、ロリコンが！」

問答無用で繰り出された怪力の右ストレートは、的確に男の鳩尾にヒット。

髭黒は、漫画のように見事な「く」の字の形でぴゅーっと5メートルほどふっとんで、街路樹に衝突、そのままガクリと意識を失った。

「人が来ると厄介です。とりあえずここから離れましょう」

紗妃の指示に、皆頷いて、自転車に跨る。

「『かつら』ちゃん、私の後ろに乗って！」

蕾様の一言に、『かつら』は逡巡した後、素直に従った。

全力疾走で、元来た道を、5分ほどかけて引き返す。

「……あなた達、誰？」

ぽつりと、『かつら』が言ったので、蕾様は、ブレーキをかけられた。

自然と、全員がそれにならう。

「正義の女性警察官です！」

きっぱりと宣言した蕾様に

「違うでしょ」

と、明雁がツッコみ、紗妃が説明を始めた。
「私たち、兵部蛍さんの知り合いです。あなたにお伝えしなければならないことがあって……」
兵部蛍、の名を聞いた瞬間、それまで生気のなかった少女の顔がかあっと赤く染まった。瞳に強い力が宿り、叫んだ。
「そんな人知らない！　帰る！」
激昂し、自転車から飛び降りる。
いったい、兵部蛍が何をして、これ程までに少女を傷つけ、怒らせたのか。しかし……。
「聞いてください、蛍さんは、昨日……」
冷静にしゃべりだした紗妃が、ビクッと大きく身を揺らし、そこで唐突に言葉を切った。
まるで、言うな、とでも大声で静止されたように見えた。
蛍は、自分が死亡したことを話して欲しくないのだろうか？
『かつら』はそもそもどんな説明にも耳を貸す気がないようで、すたすたと立ち去ろうとする。
「本当に、帰るのか？」
私の口から、思わずついて出た言葉に、少女は、足を止めた。
「家に帰りたくないから、こんな夜遅く、あんな場所にいたのではないのか？」
「……ほうっておいて」

「ほっとけない」

即座に断言すると、『かつら』はゆっくり振り返った。
強がりながら、瞳にはすがるような色がかすかに瞬いている。
蕾様が、諭すように呼びかける。

「行くとこないなら、とりあえず今晩は、私たちが住んでるところにおいでよ。寮だから、部屋はあるし……ほんとは部外者泊めるのはダメなんだけど、大人もいないし、大丈夫」

『かつら』が迷ってるのがわかった。
もう一声。咄嗟に口が動いていた。

「蛍先輩は、いないから」

たどり着いた寮を一目見た途端、まただんまりの無表情に戻って自転車の後ろにひっついていた『かつら』の顔に、明らかな驚きの色が浮かんだ。

「ここ……？」

こんな所に、住めるのか、というニュアンスがありありと読み取れる呟き。
本当にボロいからな、ここは。
パッと見、廃墟にしか見えない荒みっぷり。

「えと、中に入るともうちょっとばかりマシだから～」
「うん、内部も汚いけど、そっちは人が住んでるからこその汚さっちゅーか」

完全に及び腰になってしまった『かつら』に、蕾様と明雁が、フォローになっているか怪しいフォローをしていると、蕾様のケータイが鳴った。

「はい。あ、仁王先輩？ちょうど今寮に戻ってきたところで……」

通話中、玄関から、ケータイを耳に当てた仁王先輩が飛び出してきた。

こちらに気づき、

「おー」

と、言いながらケータイを畳む。

「倒れた寮生は大丈夫でした？」

「ああ、すぐ意識を取り戻した。思いっきり吐かせたあと、文化部長が付き添って部屋でちょっとずつスポーツドリンク飲ませてるとこだけど……あれなら平気だろ」

明雁の質問に淀みなく答えてから、仁王先輩は、目線をまっすぐ、見慣れない少女に移した。

「で、この子は？」

「『かつら』ちゃんです。蛍先輩が助けてほしいって言ってた子。今夜は家に帰りたくないというので、連れてきちゃいました」

蛍先輩、の名前に、『かつら』はまたピクリと反応したが、今度は何も言わず、唇を噛み締めただけだった。

ふーん、と首を傾け、仁王先輩は少女を見つめていたが、「ま、

いいや」と、何か自己解決したらしく、『かつら』の手をとり、ぐい、と建物の方へひっぱった。

「こいよ、ちょうどイベント中で、人多い方が盛り上がるしな。花火するか？」

「花火……？　って痛い、ちょっと、引きずらないで！」

見るからに怪しげな建物に入る決心がつかず、抵抗をみせる『かつら』を、問答無用で連行する仁王先輩。

結局『かつら』は、そのまま、悲鳴を上げながらも、寮内に引導されていった。

ご、強引だな……。

私たち4人は仁王先輩のマイペースぶりに呆れて動けずにいたのだが、取り残された形になったのは幸いだった。

「蛍先輩、そろそろ、詳しく説明してもらえないかしら？時間かかってもいいから、さ」

明雁の問いかけは、その場にいる全員の代弁だっただろう。

紗妃は、蛍先輩のいると思われる中空に視線を向けた後、頷いて、皆に言った。

「説明してくれる雰囲気ですが、やはりどうもあやふやで、これでは通訳も一仕事ですわ。

彼はタチの悪いニオイもしませんから、ちょっと反則技、使っちゃいましょうかしら」

……反則技？

何事かと訝しむ一行を、こちらです、と紗妃が先導した。

行き先は……寮の裏に広がる、雑木林。

パチン、パチン、と音が響く。引っ切り無しに寄ってくる蚊を、皆で叩きまくっていた。
こんな木が密集した湿気の多い場所、蚊の絶好の生息地に決まっている。
火事対策のためか、貯水池まであったのだから、産卵場所まで完璧といったところか。

「こんな近くに蚊の御殿があるとは……寮にやたら蚊が多いのも当然ね」

明雁が、盛大なため息と共に漏らす。
餌も豊富で、蚊にとってまさに天国のような場所だろう。

「で、どこまでいくの？」
「もうすぐ……あそこです」

雑木林のかなり奥まできたところに、ひっそりと、赤い鳥居が立てられていた。
照明もなく、真っ暗な林の中に浮かび上がるそれは、なにやら、神秘的であやしい空気びんびんで、できることなら近寄りたくない。
いますぐここから離れたい。

「以前はここに、神社があったようですね。現在でも、ちょっとした、霊の力を高めるパワー・スポットです。ええっと……」

ぐるり、と周囲を見回し、鳥居を軸に人差し指をあれこれ動かしながら何事か計算していた紗妃は、やがて、一箇所を指差して、頷いた。

「蛍さん、こちらへ」

蛍を誘導した後、大きく深呼吸。

そして、指を複雑な形に曲げて、印のようなものを結ぶと、紗妃は静謐（せいひつ）な、しかし腹の据わった響きで、私では聞き取り不可能な、呪文のようなものを述べ始めた。

紗妃の先ほど示した地点を注視していると、静かに、空気が歪み始める。

次第に、その場に、ぼんやりと、何かが現れる気配が感じられた……！

そこに何がいる、までは言えない。

視界には、何も見えないし、実際私の瞳には何も映っていない。

だが、そこに確かに、それまで私では感じることのできなかった何かが、出現した。

「残留思念が、もう少し明確になるようにサポートしてみました。意識も、先ほどより、随分はっきりしたんじゃありませんこと？蛍先輩」

紗妃の質問に、初めて聞く男の声が、私の耳にもはっきり聞こえた。

「ありがとう……。これで、普通に、しゃべれる」

ちょっと高めの、けれど、落ち着いた声音。

これが、蛍先輩の、声。

周囲の驚愕の反応を見てのことだろう。

「みんなにも、聞こえてるんだな」

と、尋ね、紗妃が深く頷くと、蛍先輩は早速説明を始めた。

「あの子は、『児玉桂(こだまかつら)』。俺が家庭教師をしていた、元教え子だ。俺は、文哉(ふみや)が言ってたとおり、一昨日、交通事故にあって、そのせいで、彼女との大切な約束を果たすことが出来なかった……」

話し出した蛍先輩に、「あの〜」と、水を指す形で提案したのは、蕾様だった。

「場所、変えてから話してもらうことって出来る？ここ、蚊が多すぎて……」

私も明雁も、超常現象を目の当たりにして完全に固まっていたのに対し、なんと沈着冷静なご意見。

さすが蕾様、大物の器にあらせられます！

5．蛍の話

一度具現化したあとは、しばらくどこへ行ってもこのままで動けるらしい。
というわけで、一同、紗妃と明雁の部屋である桐２０１号室へ赴いた。
明るいところにくると、驚くべきことに、蛍先輩の姿まで、見ることができるようになっていた。
パッと見では気付かないが、そこにいる、と意識を集中すれば、かすかにうっすらと見えるレベル。
蕾様がおっしゃっていたとおり、童顔で、仁王先輩の二つ上、にはとても見えなかった。
死人とは思えない、ふっくらした頬、ふわっとした猫っ毛、二重のくりっとと大きな瞳……
第一印象は可愛い感じだが、そのまっすぐな眼差しと、引き締まった口元からは、意志の強さが感じられた。

気を取り直して語り始めた蛍先輩の説明は、次のようなものだった。
児玉桂との出会いは、蛍が京都の大学に進学して少し経った頃の、去年の７月６日。
桂の誕生日に、彼女が夜のコンビニで万引きをしていたところを目撃したのが最初だった。
その時は事情も聞きだせず、ただ公園で一緒に星を眺めてそれきりだったが、数日後、大学の学生部で紹介された家庭教師で赴いた、金持ちの家の中学二年生の子どもが、あの少女……桂だった。
桂は純粋な性格の、本来は素直で可愛いお嬢様なのだが、父親も母親もよそに愛人を作り、あまり家には帰らないという家庭環境で、

非行に走る寸前だった。
家事や身の回りの最低限の世話は家政婦がやってくれるものの、日常の人間的な交流には乏しかったらしい。
潔癖で対人関係に不器用なところがあり、学校でもうまく友達が作れず、孤独を感じていた桂。
しかし、蛍が相談に乗るうちに、次第に桂は蛍に心を開いてくれるようになり、精神的にも安定してきた。
ところが、蛍は冬頃、桂の父親から突然、家庭教師の解雇を宣言されたのだった。

「どうして？」

蕾様の問いに、蛍先輩は

「その時は俺もさっぱり事情がわからなかった。けど、後で聞いた桂の話では、その……」

そこまで言って、やや赤面し、口ごもった。
なんだ？
私は首をひねるだけだったが、

「大方」

と、紗妃が指摘した。

「桂さんが蛍さんに恋愛感情を抱いており、それを父親が何らかの方法で知って、解雇に至ったというところではありませんの？」

蛍先輩は、こっくりと頷いた。

「そうなんだ。……娘の日記を、盗み読みしたらしい」

……最低だ。

一同、思いっきり渋い顔になる。

「それ以来、桂とも会えなくなって」

「家庭教師で会えなくても、外で会うとかできなかったの？」

明雁の質問に、蛍先輩は首を横に振った。

「桂の父親と、約束したんだ。その時はよくわからないままだったけど、解雇された時に。高校の受験が終わるまでは、桂と会わないって。その代わり、俺もいろいろ思うところを言わせてもらった。無責任で無神経な親の振る舞いが、どれだけ桂を傷つけているか。俺は、親のような気持ちで、あいつの相談に乗っていたから、これからは、貴方がちゃんとその責任を果たして、俺が必要ないように、桂を気にかけてやって欲しいと。それができるなら、会わないって」

……しかし、その約束は、父親側には果たされた様子がなかった。桂にケータイ番号は教えてあったため、それ以降も電話やメールで相談に乗ることはできたのだが、　やがて桂は寂しい、会いたいとばかり繰り返すようになった。

悩んだ末、蛍は答えた。

7月6日の、桂の誕生日にだけ、会いに行く。

どこに行きたい？と尋ねると、桂は星が見たい、と言った。

「一年のうちでも、特別綺麗な天の川を一緒に見たい。一番最初に蛍先生に会った、あの夜みたいに」

蛍は、絶対に、その日何があっても会いに行くから、約束するか

ら、それまで頑張れ、と言い、桂はその言葉を信じた。
しかし、蛍は約束を守れなかった……。

「こんな体になって、慌ててあいつの家行って、初めて知ったことがたくさんあった。詳しくは言わないけど、母親は愛人と出て行ったきり消息不明になっていたし、父親は相変わらず家にいれば娘を束縛するくせに、普段は完全に放任みたいで……今年の誕生日もやっぱり、桂は一人だった。
桂は待ち合わせ場所で、いつまでたっても現れない俺を待ち続けて。警官に補導されかかって、ようやく帰宅したけど、誰もいない。泣き続けた末、とうとう、出会い系サイトに手を出して……
俺は、ただ見てるしか出来なかった。どれだけ叫んでも、触れようとしても、桂に届かないんだ。俺は、桂の父親と結んだどうでもいい約束に囚われてたくせに、どうしても、守らなきゃならなかった約束を、守ることができなかったんだ。
誰かになんとかしてほしくて、あちこち彷徨ってるうちに、いつのまにか高校三年間を過ごしたこの寮にきてて……蕾に、見つけてもらった」

悲痛な面持ちで語っていた蛍先輩は、そこで一度言葉を切ると、深い感謝の眼差しを、蕾様に向けた。

「本当に、ありがとう」
「いや、そんな、お礼言われることじゃないよ。だって私なんて途中から見えなくなっちゃうし」
焦ったように両手を振って恐縮なさる、謙虚な蕾様。
「確かにね〜。なんで蕾は最初だけ見れたんだろ？」

明雁の疑問に、おそらく……と答えたのは紗妃だった。

「織姫コスプレの影響でしょう。蕾さんはあの時、完全に織姫になりきっていて、空からやってくるはずの男性を懸命に探していました。一方、蛍さんも、年に一度の［約束］を強く意識し、その後悔からこの世に留まって彷徨っていました……。たまたま、蛍さんの存在を、彦星に似たものと認識し、普段は霊感が現れないはずの蕾さんでも、『織姫』の能力で蛍さんの呼びかけを感知したのでしょう。

想像の範囲ですが、そう考えるのが、妥当だと思いますわ」

ほお～っと一同、感心する。

紗妃が言うと、なんとなく、そんなものかと思える説得力があった。

「てか、紗妃、あんたも……最初から見えてたのよね？あんた、何者？」

そう、それ、明雁、よくぞ聞いてくれた！

私もずっと気になっていたのだ。

蕾様も、蛍先輩も、興味深げに返答を待つ。

紗妃はしれっと答えた。

「蛍先輩には申し訳ないですけど、いちいち霊に反応してたらキリがありませんから。今回は、蕾さんが名前まで呼んでしまって……名前は、まずいんです、完全に相手を認識したことになり、そうなると簡単には諦めてくれない……そんな、引くに引けない状態だったんで、協力しましたけど」

「ありがとう。紗妃にも、感謝してる」

蛍先輩が、大きく頭を下げた。

「いえ、ですから、私は最初、気づかないふりしてたんです」

「でも、紗妃がいなかったら、間に合わなかったから」

さんきゅ、な、と真面目な顔から一変して、くしゃっと顔をほころばせた蛍先輩に、紗妃は鼻白んだように瞬きしてから、かすかに赤面して目をそらした。

ん？なんか、珍しいもの見たぞ。

「で、紗妃、あんたの正体は？霊能力者？この寮に住んでるのも、その能力とさっきの鳥居が関係したりするわけ？」

基本的に婉曲表現などの小細工は皆無、の明雁の質問は、この時も真正面から核心を突いたものだった。

紗妃は、またすぐに、いつものペースに戻って冷静に答えた。

「本職の霊能力者ではありません。祖母が占いをやっていて、その血筋で、他の方々にはあまり見えないものが見えやすいだけです。あと私に出来るのは、呪いと幽体離脱くらいですわね」

……今さらっと、恐ろしいこと言ったような（汗）

「源氏寮に来たのは、その祖母の薦めによるものです。詳しい内容は、伏せさせていただきますが……

私については、とりあえずこの辺で切り上げて、桂さんのお話に戻りませんか？」

紗妃はそれ以上周囲に突っ込む隙を与えず、蛍に向き合うと、今度は自らが質問者の側に回った。

「さっき、喫茶店前で私が桂さんに、蛍さんが死亡した旨を告げようとしたら、すごい剣幕で止めてきましたよね？　なぜですか？」

蛍先輩は、言葉に詰まったように、右手で髪をぐしゃっと一握りしてから、ゆっくり、言った。

「……あいつは、聞きたくないと思ったんだ。俺が、死んだこと」

よくわからず眉をひそめる一同に、蛍先輩は、えっと、と考えをまとめるように、つまりながら、説明する。

「昨日、約束の場所に俺が来ない時点で、絶対、おかしいと思うだろ？たぶん、桂も、俺の身に何かあったんじゃないかって、考えたと思うんだ。でも、あえて、その可能性を追究することを、避けていたようだった。ひたすら、俺はひどい奴で、約束を破る最低男だと、思い込もうとしてるように見えた……自己防衛の、無意識で」

そこまで言って、蛍先輩はまた、あ～と唸りながら、自分の髪を大きくぐしゃぐしゃと掻く。

紗妃が、目線で、先を促した。

「……これは、俺の、なんつか、自惚れみたいな感じもするし、言いにくいんだけど。あいつ、俺が死んだと知ったら、今の状態でその事実を正面から受け止めたら、後を追おうとするんじゃないかって、思ったんだ。そんなことになるくらいなら、俺は、口先だけの最低男のままでいい」

しん、と一時静寂が訪れた。

他の皆はどうかわからないが、私は言葉をなくしていたのだ。

死んでもなお、必死で教え子を守ろうとするところからも、十分想像ついたけれど……蛍先輩、本当にいい人だな。
約束を守れなくて、心底悔しい思いをしているのは言葉の端々から滲み出ていた。
謝罪や弁解を述べることができるなら、多少、蛍先輩の気持ちは楽になるだろう。
にもかかわらず、そんな僅かな救いはおろか、死を悲しんでもらうことさえ、放棄するというのか……。

「……先輩の気持ちはわかったよ。ただ」

言いにくそうに、蕾様はお言葉を続けられた。

「仁王先輩、しゃべっちゃってないかな」

……一同、顔色を変えて、梨棟屋上に直進したのだった。

6．「シュプレヒコール！」

階段を上っている途中で、小さくドン、となにか炸裂する音が聞こえてきた。
なんだろう、と不思議に思いつつ、屋上への扉を開けると、目の前の夜空に、小さな光の花が咲いていた。
梅棟屋上で、小型の打ち上げ花火を上げているらしい……こんなものまで用意していたのか。
桂は……と辺りをざっと見回すと、仁王先輩や紫先輩の傍で、花火に見入っていた。
取り乱した様子もなく、まだ、蛍先輩の訃報は届いていないらしい。

「よかった……」

無事を確認して、ほっと息を漏らした蛍先輩は、にわかに、慌てだした。

「俺、ここにいない方がいいよな？こんな姿見られたら……」
「大丈夫です。よっぽどの霊感がない限りは、意識して見つめないことには気づかないはずですわ……」

確かに、ライトは設置されているとはいえ、もう夜も更け、視界はかなり悪い。
そこにいるとわかっている私でさえ、声はすれども姿は見えず……といった具合だった。

ひゅるるるる……とまた花火が上がった音と、ぱん、と破裂する音はしたが、今回はどうしたことか、花が咲かない。

こちらは音はすれども形が見えず……と思っていたら、何か二、三個上から落ちてきた。
うち一つの真下にいた桂が、落下物をキャッチした模様。
周囲の寮生達が、何事かと集まっていた。

「まさか、あれ……パラシュート花火？」

明雁が頓狂な声を上げ、ようやく合点がいった。
説明しよう。
パラシュート花火とは、打ち上げられた玉の中に袋が入っており、その破裂とともにパラシュートが降ってくるという、非常にマニアックなおもちゃ花火である。

「こんなん、夜あげるもんじゃねーって」

誰かが呆れ混じりに叫び、その台詞の情けないニュアンスと、実際目にした花火のなんともいえないショボさへの共感から、どっと笑いが起こった。
桂も、笑ってる。
ゆっくり近付いていくと、紫先輩のよく通る声が、耳に入った。

「志望校決まってないなら、桂ちゃん、来年うちの学校おいでよ。で、寮入っちゃえば、ずっと帰らなくて済むよー」
「……それ、いいかも」

桂の口調は、柔らかかった。
だいぶ打ち解けている感じである。
源氏寮生は、多くが、開放的で、人好きなのだ。（そもそも集団生活を選ぶ時点でそういう素養があるのだろうが）積極的でお節介なくらい世話好きで、そんな人達の中だと、私のような殻に籠もり

がちな内向的な人種も、いつのまにか……絆される、という言い方は変だろうか。
少なくとも、私は、自分で勝手に築いていた壁を彼らに打ち破ってもらった経験があり、内心感謝していた。
そんな寮生たちの中でも、明るくて、抜群に人懐っこい紫先輩が桂についていてくれたのは幸いだった。
桂に第一印象で感じた、人形のような生気のなさはなりを潜め、今のこの時を、楽しんでいる空気が、彼女の周りに漂っていた。
……仁王先輩の一言までは。

「そーだよ、桂、寮生になれ！蛍先輩も、ここ出身だぞ」

桂の表情が、瞬時に凍りついた。

「……その人の話は、しないでください」

そっけない反応に、仁王先輩が、一瞬、言葉を失くした。逡巡の後、尋ねる。

「……どうして？」
「ウソツキは、嫌いだからです」

きっぱり言って、その場から去ろうとした桂だが、できなかった。
仁王先輩が、その手を強く掴んで引きとめたからだった。

「蛍先輩は、嘘なんかつかねーぞ。絶対」

静かだが、怒りを押し殺したような響きのにじむ声。
いつもへらへらしている仁王先輩の、こんな姿を見るのは初めてだった。

「俺は、おまえと蛍先輩がどんな関係だった知らない。でも、あの人が何か約束して、にもかかわらず守れなかったんだとしたら、それは、本当の本当にどうしようもなかったからだ。俺が三年間、ここで見てきた先輩は、そういう人だったし、第一、あの人はあんな状態になってもまだおまえを心配して……」

「「「仁王先輩！」」」

私は息を呑んで展開を見守っていたが、我に返って、慌ててその先を制する。

蕾様、明雁とも声がハモるかたちになった。

「お取り込み中ですけど、ちょっとこちらへ」

「……なんだよ？」

仁王先輩を桂から離れたところまで引っ張っていき、蛍先輩の意思を告げると、仁王先輩は大きなため息をついた。

「蛍先輩……相変わらずっつーか……ほんと、人好すぎ」

はい、全く同感です。

「でもさ、桂、もう内心気づいてると思うぜ。逃げてるだけで」

この暗さでは目視は不可能だろうに、仁王先輩が虚空に向ける視線に、揺らぎはなかった。

近しい関係だったために、今の状態の蛍先輩の気配なら、感じることができるのだろうか。

「蛍先輩がそんなんなってまで、気にかけるくらいの相手だろ？そ

れくらい先輩と一緒にいたんなら、わからないはずないんだ。蛍先輩は、絶対約束を破ったりしないって。……にも拘らず、守ることはできなかった。しかも、前後の連絡さえとれない状況にあるとなれば……」

「だから、無意識に考えないようにしてるんじゃないかと、蛍先輩もおっしゃっていました。桂さんが現実から逃げ続けたいだけ、逃げればよいというのでしょう？」

紗妃の言葉は、内容は蛍に理解を示しているようでありながら、納得できない、という不満がありありと滲んでいた。

……確かに、このままでいいのかとは、私も思う。

その時、三年の文化部の先輩が声を張り上げた。

「これにて花火は終了でーす」

パチパチパチ、とねぎらいの拍手が起こったが、先輩が更に

「引き続き、鴨川横断計画に移行します」

と続けると、2、3年生からはいいぞ！と大きな歓声が上がった。

一年生は何事かときょとんとしているが……先輩達に促され、よくわからないまま参加する流れになっていた。

「今年は梅棟２０４の春宮（はるみや）くんの協力で演出がすごいんで、是非ご参加ください！」

今年は、ということは、『鴨川横断計画』とやらも毎年恒例の行事なのだろうか……

桂も、紫先輩に手を引かれて、一緒に行くようだった。

「文哉！」

友人に呼ばれた仁王先輩は、蛍先輩の方を見て名残惜しそうだったが、軽く頭を下げるとそちらへ走っていった。

寮長という立場上、行事をほったらかしておくわけにもいかないのだろう。

「私たちも、行ってみよっか」

蕾様の一言を合図に、私たちも出口へ引き寄せられるような人の流れに身を任せることにした。

「シュプレヒコール！」

「「「おお～！」」」

「学園は、午前中の授業を全て廃止せよ！」

「「「廃止せよ！」」」

「週休五日制！」

「「「週休五日制！」」」

「学生は連帯せよ！」

「「「連帯せよ！」」」

やかましく声を張り上げながら、寮生達は一路鴨川に向かっていた。

先頭でスピーカーを持った仁王先輩が音頭を取り、他の寮生達が鸚鵡返しで叫び返す。

なぜか四、五人ごとに腕を絡め、スクラムを組んでの行進。

時刻は午後八時。近所迷惑この上ないが……

もはや恒例の年に一度の数分間、と諦めてくれているのか、聞いたところ、蛍先輩の代から、苦情はあまり来ないらしい。

桂を探すと、列の真ん中辺りで、紫先輩と隣り合ってちゃんと肩を組んでいた。
……だけでも意外なのに、シュプレヒコールにまで参加しているようだった。
あの内気そうな桂が。恐るべし、集団の魔力。
最後尾で、私の横におられる蕾様も、明雁も、ノリノリで叫んでいる。
その向こうに、街灯の明かりで一瞬うっすらと見えた蛍先輩も、スクラムこそ組めないものの、一緒になって叫んでいた。
確かに、この大唱和の中でなら、知らない声が混じっていても気づくものはいないだろう。

「おまえらも、声出してみろよ。ストレス発散になるぞ」

郷に入りてはの精神で一応腕を組んではいたものの、静かに歩いていた私と紗妃は、蛍先輩の言葉に、どうしたものかと互いに目くばせし合った。

「……私は、遠慮しますわ」

紗妃が断ると、そっか、と蛍先輩はあっさり答えた。

「未景は？」
「未景ちゃんもやろうよ！気持ちいいよ！」

蕾様に誘われては、尻込みするわけにもいかない。

「赤点撤廃！」
「「「赤点撤廃！」」」
「試験撲滅！」

「「「試験撲滅！」」」

しょうもない、と呆れつつ、大人数で叫びながら行進すると、妙な昂揚と一体感があった。

確かに、なんか、気持ちいい。

夏の湿気に加え、人が密集することで空気は余計じめっと肌にまとわりつくようだったが、にもかかわらず、不思議な爽快感があった。

街灯の下で、また、ちらりと、大きく口を開ける蛍先輩が見えた。

その表情が、なんだか、泣き笑いのようだったので、私は、慌てて目をそらした。

7．一夜限りの天の川

鴨川の土手に到着した。

「ここからは、来たい馬鹿だけついて来い！」

そう叫ぶと、仁王先輩は、なんと服のままじゃぶじゃぶと川を渡り始めた。

「横断開始！」

文化部長が指揮を執り、無謀な寮生たちが「おお～」と、拳を振り上げながら、後に続く。

「おお～！」

先陣を切った寮生たちと同様、がむしゃらに声を張り上げ、児玉桂まで水に突っ込んだときは目を疑った。

屋上で、仁王先輩に諌（いわ）められた時は、あんなに思いつめた顔をして、泣き出しそうにも見えたのに……

「やけになってる感じですわね」

紗妃に言われて、はっとした。

さっきのシュプレヒコールの時も、それこそストレス発散で、破れかぶれのような気持ちだったのかもしれない。

「未景ちゃん達、ごめん、桂ちゃんについてってあげて！」

身長１４０センチ強、の小柄な体型で、川に入るのは危険と思われる紫先輩に、頼まれなくても、私はついていくつもりであった。

毒食わば皿まで、だ。

「任せてください！」

まず明雁が第一歩を踏み出したとき……

光が、舞い始めた。

最初は、一つ。

一瞬、川の上でぽうっと何かが灯った、と思っていたら、それが、2、3と次第に増えていく……。

気づけば、緑がかった黄色の、何十という光が、点滅を繰り返しながら、乱舞していた。

「……ホタル……！」

「驚いた？実家がゲンジボタルの人工飼育しててさ。この時のために貰ってきた」

いつの間にか傍にいたらしい2年の文化部員……おそらく、春宮先輩、が、得意げにニヤッと笑いながら説明してくれた。

「今年だけの出血大サービスだから、しっかり堪能してくれ」

鮮やかな無数の光が、水面上で光っては消え、そしてまた光りながら自在に行き交う光景は、見たこともないほど幻想的で、息を呑むほど美しかった。

上空は、いつの間にか厚い雲で覆われ、せっかくの七夕の星空を愛でることは叶わなかった。

しかし、それがかえって、この河原一帯に、星星が降り注いだような錯覚を覚えさせた。

「……桂ちゃん？」

緊張した声で呼びかけると、紗妃はすぐさま、川に飛び込んだ。ホタルに見とれていた私も、我に返って慌てて桂のところへ向かう……なんだか様子がおかしい。

桂は、動かず、ホタルに見入っていたようだったが、後姿に近づくにつれ、その肩が小さく震えているのがわかった。

「桂ちゃん……」

桂は、無言で、ボロボロと、大粒の涙を流していた。

「……ごめんなさい」

一言、口にすると、とまらなくなったようだ。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……」

しゃくりあげながら、同じ言葉を繰り返す。

「ウソツキなんて言って、ごめんなさい。蛍先生が、いい加減なこと言うはずないのに。

勝手に怒って、ごめんなさい。臆病で、ごめんなさい……」

あまりに美しい、幻想的な光景を前にして、桂のきつく結ばれていた心が、解けたかのようだった。

私たちは、誰も、声をかけられず、じっと見守るしかなかった。

……ただ一人を除いては。

「桂」

不意に聞こえた、懐かしい声に、桂の身が、大きく動いた。

「謝るのは、俺のほうだ。約束、守れなくて、ごめん」

数え切れないほどのホタルが放つ光の中、桂の前に、ぼんやりと、蛍先輩の姿が浮かび上がった。

「蛍先生……」

「俺はもう、一緒に遊んでやることも、相談に乗ってやることもできないけど……

よかったよ、いつかおまえを、こいつらに会わせてやりたかったんだ」

こいつら、のところで、蛍先輩は、光の乱舞の中、こちらで起こっていることには気付かず、はしゃいで川を渡る者達、土手で会話に花を咲かせる者達、ホタルに見入る者達、そして、桂を囲む私達……寮の後輩達を見回し、目を細めた。

「あの家や、学校だけが、おまえの世界の全てじゃねーんだ。

遠くの星に憧れなくても、何かのきっかけで踏み出した先に、こういう場所があったりする。

それを、最後に、伝えられてよかった」

「最後なんて嫌だよ！いかないで、蛍先生！」

涙でぐしょぐしょになりながら、必死で叫ぶ桂を、優しい眼差しで受け止めながら、蛍先輩の姿が、さらに透き通り、揺らいでいく。

「私、まだ教えてほしいことがいっぱいあるの。聞いてほしいこともいっぱい……蛍先生に、笑ってもらいたい。呆れられても、叱られても、嫌われてもいいから……いかないで！ここにいて！」

ずっと穏やかな表情で見つめ返していた蛍先輩は、不意に堪え切れなくなったように唇をかむと、空を見上げた。

涙が零れそうになったのを、慌てて防いだように見えた。

しかし、次にまた桂に向けた顔と声は、さきほど一瞬過ぎった悲痛な面影は跡形もなく、能天気なくらい明るいものだった。

「あーあ、空、曇っちゃったな。もしかしたら、一緒に、天の川見れるかとちょっと期待してたのになあ……一日遅れじゃ意味ないから、完全に俺の自己満足だけど」

蛍先輩の言葉を、桂は大きく頭を振って否定した。

そして、涙をぬぐい、大きく一回深呼吸すると、力を振り絞るように、小さく、笑った。

蛍先輩はちょっと瞬きしてから、周囲を見渡し、ぱっと顔をほころばせた。

そして、次の刹那、その笑顔のまま、すーっと静かに、消えていった。

蛍先輩もちゃんと、気づいたのだろう。

桂と先輩の間に流れる、今夜限りの天の川に。

夏の一夜に命を灯す、ホタルたちの、光の川……。

8．ハッピーエンド??

「私、来年絶対、ここに来ますから。帰って、勉強します」

無事鴨川を横断し、仁王先輩達からの拍手の歓迎に笑顔で応えた後、きっぱり宣言した桂は、最初に会った時のあの少女とはまるで別人のように、ゆるぎなく凛としていた。

こうして、兵部蛍先輩は、児玉桂に、切ない思い出と、大きな希望を残してこの世を去った……ように、思われたのだが。

「おい……」

「！」

「なんで」

「うそ」

「……あらまあ」

川から帰寮して、桐２０１号室の扉を開けたすぐそこに現れた人物に、私、蕾様、明雁、そして紗妃は度肝を抜かした。

成仏したはずの蛍先輩が、まだそこに鎮座ましましていたからである。

「俺……消えてないんだが。どうしてだ?」

蛍先輩は、めちゃめちゃ居心地が悪そうに、顔をしかめていた。

そりゃそうだろう。あんな感動的な別れを交わしたばかりなのだ。

例えるなら、三学期にお別れ会を盛大に開いたにもかかわらず、引越しが無しになって新学期また教室に顔を出さなきゃならなくなった生徒……それよりも、更にバツが悪かろう。

「おそらく……残留思念を具体化する時にかけた術の影響だと思います……」

さすがに、いつも冷静な紗妃も、申し訳なさそうにもごもごと言いよどんでいる。

「いくら本で読んで簡単にできそうだと思われても、やっぱり素人が、うかつに手を出していい領域ではないのですわね」

素人……だったのか紗妃。

まさか一度試してみたかったとか、そんなんじゃないよな？　な？

と、聞いてみたかったが、肯定されそうで恐くて、私にはとてもその勇気がなかった。

「……で。どうやったらあの世へ行けるわけ？」

「さあ？」

「『さあ？』！？」

顔色を変える蛍先輩に、紗妃は言いにくそうに、曖昧な笑顔を浮かべながら、言葉をつむぐ。

「失敗例については載っていなかったのでなんとも……でも、蛍先輩は、さっきのあのパワー・スポット……寮の裏の雑木林で具体化したので、そこから離れるに従って、周囲から見える影は薄くなることが予想されます。

鴨川では、桂さんへ伝えたいという思いがあまりに強かったため、一時的に姿が濃くなってましたが……。成仏しかかる程にまでこの世への未練が消えた今、寮外にでれば、うろついていても、一般人に目視されて騒がれることはないので、ご安心ください」

「そっか、それはよかった一安心。……なんて言う訳ねーだろ！未

練が消えた今、おとなしくあの世へ旅立ちたかったよ！俺はずっとこの不安定な姿のままなのかよ？」
「除霊師などの専門家に相談すれば何とかなるでしょうが……その場合、高額な報酬を要求される可能性が極めて高く、その費用をどこから捻出するか、という問題になりますわね……」
「え……あの……紗妃……？」

説明しながら、紗妃がしょぼん、とうな垂れて、涙声になってきたので、それまで激昂していた蛍先輩は、にわかに焦り始めた。

「すみません……調子に乗って、とんでもないことをしてしまいました……余計なことでしたね……」
「……いや、余計なことなんかじゃ、なかった。紗妃がいなかったら、桂に最後の別れを告げることなんかできなかったし……おかげで、あいつも気力を取り戻してくれたわけだしな」
「そうよね。第一、あの世なんていいところかもわかんないし。蛍先輩、寮好きだったんでしょ？
もう一度寮生できるなんてラッキーじゃない？」
「私も、蛍先輩とこれからも一緒にここで過ごせるなんて嬉しい。きっと仁王先輩とか、3年の先輩達は大喜びだよ」

明雁と蕾様のフォローに、蛍先輩は

「そ、そうだよな」

と、唇の端を引きつらせながら、無理矢理微笑んだ。……本当に、泣けるほどいい人だ。ううっ。

「私、絶対、蛍先輩にかかった呪縛を解く方法を探しますので。それまで、待っていていただけませんか？」

大きな瞳の縁に涙をためながら、真剣な表情で嘆願する紗妃に、蛍先輩は、わかった、と寛大に理解を示した。

「紗妃も、わざと間違えたわけじゃないもんな。そもそも、今回の件、協力してもらったのは俺の方だし。さっきは混乱しちゃって、怒鳴ったりして悪かった。だから、もう泣かないでくれ。頼む……」

「先輩……ありがとうございます」

くすん、と可愛らしく鼻をすすり、紗妃は深々と頭を下げた。

しかし、その顔をかがめる一瞬、私は確かに見てしまったのだ。紗妃の形のいい唇に、薄い笑みが小さく浮かぶのを……。

ちょっと失礼、と席をはずした紗妃の、後を追う形で私も部屋を抜け出した。

大いに躊躇いながら、一階の共用トイレの前で、「紗妃……」と切り出すと、紗妃は、とても満ち足りた笑顔で振り返った。

「七夕に運命の出会い……最高ですわ」

「あの……紗妃……？」

「蛍先輩ったら、どんな表情してもなんであんなに可愛いんでしょう。でもって性格は男前。どうしましょうどうしましょう！」

頬を紅潮させ、興奮したようにはしゃぎまくる紗妃。

「……まさか、だが、紗妃。術を失敗したのも、わざと……」

すらっと長い人差し指が、私の唇を押さえた。

「とんでもないことですわ。そんなこと、あるわけないでしょう？」
台詞は否定していたが、芝居がかった物言いは、私の耳には白々しく響いた。
紗妃はまた、いつもとは別人のように浮かれながら、個室に入っていく。
「彼氏イナイ暦十六年、ついに理想の男性に巡り合えましたわ♪」
「彼氏って、いいのか、ユーレイでも！人に紹介もできないし……」
「人に紹介したくてお付き合いするわけじゃありませんから」
それはまったくその通りだが。
「たとえば、その、触れ合うこともできないわけだし」
ジャー、と水の流れる音がして、出てきた紗妃は、鮮やかに微笑んで、断言した。
「私なら、できますから」
なら、いいのか？
これって、いいのか？
でも、蛍先輩の気持ちは……。
混乱する私をよそに、さっさと手を洗い、立ち去ろうとする紗妃。
階段の影に消える間際、そうそう、とうそぶきながらこちらを振り返った。
「もし、私が何か企んだとか妙な噂を流したりしたら……」
そこで、美少女は、完璧な笑顔で言い切った。

「呪いますから（はあと）」

こうして、この日、新たな寮生が一人、加わった。

寮内でだけ姿を見ることができる浮遊霊、兵部蛍（享年１９歳）。

仁王先輩の計らいにより、二人部屋なのに一人しか住んでいなかった梨２０５号室に暮らすことになった彼が、六条紗妃の彼氏となる日が果たしてやってくるのかはまだまったくもって不明だが、奇人変人の巣窟であるこの寮に、また一人、とんでもない住人が追加されたことは、紛れもない事実であった。

＜終＞

8．ハッピーエンド??（後書き）

最後までお付き合いありがとうございました☆
源氏寮を舞台にした作品は他にも存在するので、
よろしかったらそちらにも目を通していただけたらこの上ない幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7605o/

源氏＜寮＞物語　～蛍の章

2011年11月13日19時34分発行